

ナーガ調伏のモチーフ

——*Nandopananda*[-*nāgarājadamana*]の形成に関連して——

林 隆 嗣

1. はじめに パーリ『律蔵』*Vinayapīṭaka* (Vin) の註釈書で列挙される「仏典結集で収載されなかった教法」は、正典として三蔵が確定していく段階でその範囲から除外された文書という意味で、上座部大寺派の外典とみなすことができる。そのうち、*Nandopananda*[-*nāgarājadamana*]は、*Visuddhimagga* やその他のパーリ註釈文献に挿入されていることから、全体像を知ることができる唯一の文書である。これまで筆者は、この文書の特徴を明らかにすると共に、上座部仏教における説話の伝承と展開を調査し、その位置づけを考察した(林 2014a)。また、北伝仏教資料において語られる類話に関して比較検討を行った(林 2014b)¹⁾。

Nandopananda は、目連が竜王ナンドーパナンダを調伏する説話である。両者の対決は他の説話に見られない独自の構成内容だが、そのうち、煙と火の対決だけは様々な竜調伏説話に共通する基本モチーフである。本稿では、パーリ仏典に描かれる他のナーガ調伏譚と比較し、内容や表現の共通点や変遷を検討するとともに、北伝仏教の類話資料におけるモチーフの継承状況についても視野に入れながら上座部の外典文書 *Nandopananda* の形成について考察する。

2. 釈尊とサーガタの竜調伏 パーリ三蔵にはナーガ調伏のエピソードは2例しかない。1つは、Vin 大品の仏伝の中で、結髪行者ウルヴェーラカッサパを教化するために釈尊が起こした最初の神変 (Vin I.24-25) として語られる。もう1つは、Vin 経分別の波逸提法 (Pācittiya) 第 51 条「飲酒戒」の由来として語られるサーガタ長老²⁾の事績である (Vin IV.108-109)。両者は結髪行者の祭火堂に住むナーガという設定を共有しているが、他にも多くの一致が見られる。まず、Vin で語られる2つの竜調伏説話を比較しながら両者の関係を検討しておきたい。

2.1. 竜の評価と警告 飲酒戒因縁譚は、遊行途中の釈尊が牧牛者や農民などから次のような警告を受ける場面から始まる。

(198)

ナーガ調伏のモチーフ (林)

mā kho bhante bhagavā Ambatitthaṃ agamāsi, Ambatitthe bhante jaṭilassa assame nāgo paṭivasati iddhimā āsiviso ghoraviso, so bhagavantam mā viheṭhesī ti. (Vin IV.108)

ここでの竜の形容を含む最後の部分は、そのまま、釈尊の竜調伏説話においてウルヴェーラカッサパから釈尊に対する事前警告として用いられたセリフと重なる (Vin I.24: nāgarājā iddhimā āsiviso ghoraviso, so taṃ mā viheṭhesī ti.)。この説話には韻文風に再構成された重複パートが接続するが、そちらにも同じ表現が繰り返されている (Vin I.25)。このフレーズはパーリ三蔵の中でこの両説話にしか存在しないため、排他的な一致と言える。

2.2. 訪問と入室 尊者サーガタが竜の居場所に向かっていく。この場面は、以下のように、サーガタが結髪行者の修行道場を訪れて、祭火堂に入り、草の敷物を敷いて結跏趺坐で着座するまでの一連の様子を描写する。

atha kho āyasmā Sāgato yena Ambatitthakassa jaṭilassa assamo ten' upasaṃkami, upasaṃkamtivā agyāgāraṃ pavisitvā tiṇasanthāraṃ paññāpetvā nisīdi pallaṅkaṃ ābhujitvā ujum kāyaṃ paṇidhāya parimukhaṃ satim upaṭṭhapetvā. (Vin IV.109)

一方、釈尊の竜調伏説話では、道場訪問の後にカッサパの警告を受け、それから祭火堂に入場するので、構成が異なる。しかし、対応する場面の文章はまったく同じものである。

atha kho bhagavā yena Uruvelakassapassa jaṭilassa assamo ten' upasaṃkami, upasaṃkamtivā (Vin I.24¹⁸⁻¹⁹) . . . agyāgāraṃ pavisitvā tiṇasantharakam paññāpetvā nisīdi pallaṅkaṃ ābhujitvā ujum kāyaṃ paṇidhāya parimukhaṃ satim upaṭṭhapetvā. (Vin I.24)

このうち、結髪行者の修業道場への訪問を述べる前半のフレーズは、パーリ三蔵ではこの2箇所以外に見られない。類似表現は他に1箇所あるが、全同ではない³⁾。結跏趺坐してからの一連の動作 (pallaṅkaṃ ābhujitvā . . . satim upaṭṭhapetvā) は、パーリ三蔵で頻繁に用いられる定形句⁴⁾ であるが、「祭火堂に入って」(agyāgāraṃ pavisitvā) 以降を含めて全体が一致するのは、少なくとも Vin ではこの2箇所だけであり、ニカーヤでも1箇所にしか存在しない⁵⁾。

2.3. 対決と調伏 サーガタが祭火堂に入室したことに怒った竜が煙を吐き、戦闘が開始される。ここで煙と火を互いに放つ対決の構想も釈尊の竜調伏説話と同じものである。そこで、サーガタと竜の対決場面 (Vin IV.109) と釈尊と竜の対決場面 (Vin I.24-25) とがどのように対応しているかを比較してみよう。

サーガタの竜調伏	釈尊の竜調伏
<p>atha kho so nāgo āyasmantaṃ Sāgataṃ pavitṭhaṃ disvāna dummano padhūpāsi. āyasmāpi Sāgato padhūpāsi. atha kho so nāgo makkhaṃ asahamāno pajjali, āyasmāpi Sāgato tejodhātuṃ samāpajjitvā pajjali. atha kho āyasmā Sāgato tassa nāgassa tejasā tejaṃ pariyādiyivā yena Bhaddavatikā ten' upasaṃkami.</p>	<p>atha kho so nāgo bhagavantaṃ pavitṭhaṃ addasa. disvāna dukkhī dummano padhūpāsi. atha kho bhagavato etad aho si. . . atha kho bhagavā tathārūpaṃ iddhābhisamkhāraṃ abhisamkharitvā padhūpāsi. atha kho so nāgo makkhaṃ asahamāno pajjali. bhagavā pi tejodhātuṃ samāpajjitvā pajjali. . . atha kho bhagavā tassā rattiyā accayena tassa nāgassa anupahacca chaviñ ca cammañ ca maṃsañ ca nhāruñ ca aṭṭhiñ ca aṭṭhimiñjañ ca tejasā tejaṃ pariyādiyivā patte pakkhipivā Uruvelakassapassa jaṭilassa dassesi. . . ti.</p>

このように両者を併記してみると、竜とサーガタとが交互に煙火を放つ様子を描写する文章は、すべて釈尊の竜調伏説話に存在することがわかる。中でも、自身の光熱力でナーガの光熱力を奪い取って (tassa nāgassa tejasā tejaṃ pariyādiyivā) 勝利するという、他には見られない独特な表現もそのまま使われている。サーガタの説話は、この後に飲酒で失敗する逸話があるが、竜調伏場面は、釈尊の竜調伏説話を意識して、そこからプロットや構成要素のみならず文章そのものを借用しながら語り直したものであるのは明らかである。

3. 『ジャータカ註』から *Nandopananda* へ サーガタの竜調伏を含む飲酒戒の因縁譚は、さらに、パーリ註釈文献の『ジャータカ註』(Ja I.360**)と『増支部註』(Mp I.324-327)において再び語られる。前者は *Jātaka*, no. 80, *Sūrapāna-jātaka* の現在話であり、後者は、『増支部』で「光熱の要素 (火界定) の巧みさについての第一人者」⁶⁾と認定された彼について解説する箇所である。そのうち、Jaでは、以下のように竜に固有名が付与されており、警告文が改変されている。

mā bhante bhagavā Ambatitthaṃ agamāsi, Ambatitthe jaṭilassame Ambatitthako nāma nāgo āsiviso ghoraviso bhagavantaṃ viheṭtheyyā ti. (Ja I.360**)

竜を評価する形容句について、Vinの文章では *iddhimā āsiviso ghoraviso*⁷⁾ (3+4+4) という語句配列で音節の増長 (waxing syllables) が見られたが、Jaでは *iddhimā* を欠き、この口語的な特徴を持つセットフレーズが失われている。Vinでは一致していた警告の言葉も変更されている。また、Vinにおける2つの竜調伏説話は

(200)

ナーガ調伏のモチーフ (林)

どちらも、同じ警告が形式的に3回繰り返されるが、Jaでは、*tatiyaṃ* (3回)というだけで文章を繰り返さない。さらに、Jaでは訪問表現が単純化し、祭火堂という具体的イメージを失い、結跏趺坐の定型句も消える。Mpの訪問場面も簡略な表現となっているが、Jaとは関係しない⁸⁾。

次に、Jaにおける両者の対決場面と調伏の様子を比べてみよう。

nāgo makkhaṃ asahamāno dhūmāyi. thero pi dhūmāyi. nāgo pajjali. thero pi pajjali. nāgassa tejo theram na bādhati, therassa tejo nāgaṃ bādhati. evaṃ so khaṇena taṃ nāgarājānaṃ dametvā saraṇesu ca sīlesu ca paṭiṭṭhapetvā satthu santikaṃ agamāsi. (Ja I.360**)

ここでは聖典 Vin 由来の *nāgo makkhaṃ asahamāno* (二重下線部) を残しつつも、対決は両者の煙火を単調に対比するだけである。しかし、客観的な視点で竜と長老の光熱力に関する状況を解説する現在時制の文 (下線部) は、従来なかった新要素である。また、Vin の記述と大きく相違するのは、調伏後の竜が信者として仏道に入信する点である⁹⁾。

Mp I.326 にも、竜と長老の煙火が対比されるが、「光熱力を奪う」(*tassa tejaṃ pariyaḍiyi*) という聖典に類似した表現が残存する¹⁰⁾ ので、Mp が Ja のダイジェスト版ではなく Vin に基づくといえるかもしれない。調伏後に竜を帰依させる展開は Ja と同様の改変だが、帰依の事情やその後の竜のふるまいに関する記述はより丁寧で、Ja と関連しない内容が見られる¹¹⁾。

このように継承されてきたモチーフと描写の変遷を踏まえた上で、次に *Nandopananda* に目を向けてみよう。まず、*Nandopananda* における状況設定や戦闘に至るまでの過程は、釈尊やサーガタの竜調伏説話と異なるため、調伏者 (目連) がナーガの居室に入り結跏趺坐で着座する場面は存在しない。煙火の対決に関する描写は、以下の通りである。

*nāgarājā padhūmāsi.*¹²⁾ **thero pi** (Th-a *omits pi*) *na tuyhaṃ yeva sarīre dhūmo atthi, mayham pi atthī ti padhūmāsi. nāgarājassa dhūmo theram na bādhati, therassa pana dhūmo nāgarājānaṃ* (Th-a, Ap-a: *nāgarājāṃ*) *bādhati. tato nāgarājā pajjali. thero pi* *na tuyhaṃ yeva sarīre aggi atthi, mayham pi atthī ti pajjali. nāgarājassa tejo theram na bādhati, therassa pana tejo nāgarājānaṃ* (Th-a: *nāgarājāṃ*) *bādhati.* (Vism 399-400, Th-a III.178, Ap-a 249)

この中で、太字部分の簡潔な煙火の対比は、明らかに Ja の描写と関係する。この箇所は、Vin におけるサーガタの竜調伏譚から Ja で改作された表現である。さらに注目すべきは下線部の文章である。上で指摘した通り、過去の出来事として叙述される中で突然挿入された現在形の文章もまた Vin で見られなかった Ja の独

自の要素である¹³⁾。しかも、Vinの両説話における対決はどちらも竜が光熱力を奪われて終わるのだが、註釈(JaとMp)では、調伏された竜が仏教に帰依する様子が描かれる。これも *Nandopananda* と一致する (nāgarājā bhagavantam vanditvā, bhante tumhākaṃ saraṇaṃ gacchāmi ti āha. bhagavā, sukhī hohi, nāgarājā ti vatvā)。特に、敗北した竜が調伏者の足元にひれ伏して帰依を申し出るけれども、それを断って、釈尊の許に竜を連れて行くというのは、Mpと *Nandopananda* に共通するプロットである¹⁴⁾。

4. 北伝資料の様相 以上のように、*Nandopananda* における煙火の対決場面は、聖典 Vin の竜調伏説話に辿って形成過程を追うことができるが、これは上座部大寺派の特殊状況なのか、それとも北伝仏教でもそれぞれの内容や戦闘場面の関連が見られるのか確認しておこう。

まず、『四分律』と『五分律』の飲酒戒因縁譚で語られる善来 (Svāgata, 娑伽陀, 娑竭陀) の竜調伏 (T no. 1428, vol. 22, 671b21-c8; T no. 1421, vol. 22, 60a2-18) は、状況設定、展開、対決場面、無力化した竜を鉢に納める結末に至るまで、明らかにそれぞれ同じ律蔵に見られる釈尊の竜調伏説話 (793b23-c4; 108a14-20) の焼き直しであり、パーリ律と同様である。『摩訶僧祇律』は仏伝を欠く上に、飲酒戒因縁譚については『善来比丘経』 (*Svāgatabhikṣu-sūtra) という経典¹⁵⁾ に託すのみで、詳細が不明である (T no. 1425, vol. 22, 386c13-16)。

しかし、説一切有部 (根本有部) 系の律蔵では、善来と竜の戦闘場面の描写は、釈尊と竜の戦闘場面に基づきつつも、次第に目連のナンダウパナンダ竜王調伏説話と密に繋がる。『十誦律』 (T no. 1435, vol. 23, 120b29-121a8) や『根本有部律』 (T no. 1442, vol. 23, 858b7-c27; cf. *Divyāvadāna* [= Divy] 182-188) の飲酒戒因縁譚では、煙火の対決の前後に、竜が降らす雷電や刀剣などを善来が花などに変える場面が加わる。『十誦律』より古いとされる竺仏念訳『鼻奈耶』 (T no. 1464, vol. 24, 891b15-c7) に煙火の対決がなく、剣雨などの変化だけが語られている点は不思議である。興味深いのは、『根本有部律』の入王宮戒 (入王宮門学処) の因縁譚として語られるナンダウパナンダ竜王調伏説話では、伝統的な煙火の対決を継承せずに、むしろ剣雨などの変化をクライマックスに用意している点である (『増一阿含』も同様)。この剣雨などの変化は、同じ有部系律蔵の善来の竜調伏と類似し、それが「慈定」 (maitrīsamāpanna) の力によるという点も一致している。さらに、1日3回竜が毒気を吐いて生き物を害しているという前提状況も、調伏後に業報に関する説法がなされる点も2つの説話に共通する。

そもそも有部系の律では波逸提法の第79条に飲酒戒が置かれ、すぐ後の第82

(202)

ナーガ調伏のモチーフ (林)

条に入王宮戒が置かれているため、後者の因縁譚に含まれるナンダウパナンダ竜王調伏説話に飲酒戒因縁譚からの影響が見られるのは当然なのかも知れない。その一方で、『根本有部律』の飲酒戒因縁譚を見ると、アシュヴァティールティカ竜の調伏が、「ナンダウパナンダ竜王調伏」の評判を既に知っていた人々によって世尊に依頼されるという設定になっており (858b26, 但し蔵訳と Divy にはない)、後者への目配せもある。ちなみに、『増一阿含』のナンダウパナンダ竜王調伏説話では、比丘たちが次々と竜調伏に志願しては世尊に却下されるなか、最後に娑竭 (Svāgata, 大正蔵「婆竭」) が却下されてから目連の登場という流れ (T no. 125, vol. 2, 703c2-12) になっているが、ここでは善來の竜調伏が意識されているかもしれない。

5. まとめ 本稿では、Vin 内部で仏伝を焼き直して作られたサーガタのナーガ調伏譚がパーリ註釈文献において改作されたこと、そして、ここで改変された新しい演出法と特徴的な表現が *Nandopananda*[-*nāgarājadamana*]における煙火の対決場面に現れるという過程を確認した。上座部の外典文書 *Nandopananda* が表現の上でしばしばパーリ註釈文献と一致することは、林 2014a で指摘したが、モチーフの継承という側面から眺めても、この文書が上座部の伝統の中にあって、註釈文献とともに語られていた痕跡が見えてくる。

調伏者の側に注目してみると、釈尊は結髮行者の祭火堂の竜が放つ火炎に対抗するために火界定に達したが、同じ状況、同じ方法でアンバティッタの竜を調伏すべきは、仏弟子の中で火界定第一のサーガタにおいて他にいない。しかし、須弥山を七重巻きにするほどの強大な竜王を相手にする物語になれば、煙火を超える華々しい対決が期待されるし、またそれを担える人材が必要であろう。釈尊からサーガタに引き継がれたナーガ調伏の役目が、ここで神通第一の目連に交代することになる。*Nandopananda* において竜王が目連に対して *mahiddhiko samaṇo* と認めるセリフ (Vism 400, etc.) が、結髮行者の釈尊に対する評価、*mahiddhiko* (*kho*) *mahāsamaṇo mahānubhāvo* (Vin I.25) を彷彿とさせるのは偶然ではないだろう。それは、目連が竜王に対抗しうる神変の力を有するからこそ、彼だけに竜王調伏を託したのだと、釈尊自身の言葉で語らせている場面にも見てとれる。

北伝仏教においても、仏伝を受け継いで善來の竜調伏譚が形成されたことがわかる。戦闘の最中、善來について「継続的に (*abhikṣam*, cf. *yang dag yang du* 繰り返し) 火界定に入定する最上者である」(Divy 186)¹⁶⁾ と、釈尊が解説するのは、かつて自らが火界定に達して行った竜調伏に関する後継者と認める発言である。この竜調伏の説話が人々に親しまれ、よりダイナミックで壮大な見せ場が加わってい

くなかで、敵対する竜自体も強大化し、アシュヴァティールティカとナンダウパナンダが重なり合うように変遷していったと考えられる。目連の竜王調伏説話は、単経『竜王兄弟経』(降竜経, 難竜王経)など多様に展開し、部派を越えて共有されたが、一方、善來の竜調伏譚(を含む、飲酒による過失の話)も同様に、現存漢訳『仏説沙曷比丘功德経』(cf.『経律異相』巻第16)のように独立し、大胆に脚色され普及したと考えられる。特に、律の因縁譚から飛び出していったん単独經典化したものが一定の権威や評価をもって再び律に呼び戻されるという『善來比丘経』の事例(『僧祇律』)は、上座部大寺派において *Nandopananda* が正典の枠から除外されながらも教団に認知され受容されたことと比べると、境界に漂うテキストの位置づけや扱いの違いを示している興味深い。

- 1) なお、その中で注14において謝辞を申し上げるべき先生のお名前を誤って記載してしまいました。改めて、類話をご指摘いただいた引田弘道先生に感謝いたしますとともに、謹んでお詫び申し上げます。 2) 初期仏典におけるサーガタの伝承については、岩井2006:133-136, 森・本澤2009:220-226に詳しい。 3) Vin I.245 = Sn, p. 111, cf. MN II.146: *atha kho bhagavā . . . yena Keṇiyassa jaṭilassa assamo ten' upasaṅkami, upasaṅkamitvā . . .* 4) Allon 1997: 219, 236, 247はこの定型表現について口頭伝承の特徴である *waxing syllables* のパターン(句としては7+8+11, 絶対分詞としては4-4-5)と *vedha* タイプの韻律的パターンを指摘している。しかし、Jaでは *pallaṅkena nisīdi* と、簡略化されている。これは三蔵(DN, Vin 小品)・註釈どちらも出る。しかし、*pallaṅkena nisīdi* は註釈時代の結跏趺坐の表現として定着していたわけではない。一方、Mpに見られる *pallaṅkaṃ ābhujitvā nisīdi* の用例は註釈限定: Sv II.640; Ps I.160, II.183; Spk I.54, II.196; Mp I.181; Dh-a I.370; Th-a III.134; Thī-a 162; Ap-a 19, 76, 264; Bv-a 95, 153; Ja I.16**, 71**, 347**。 5) MN III.238: *atha kho bhagavā kumbhakārāvesanaṃ pavisitvā ekamantaṃ tiṇasantharaṃ paññāpetvā nisīdi pallaṅkaṃ ābhujitvā ujum kāyaṃ pañidhāya parimukhaṃ satim upaṭṭhāpetvā*。ここでは、釈尊と沙門プクサーティとの一夜の対話と後者の帰依という話で、構造が類似している。 6) AN I.25; cf.『増一阿含経』T no. 125, vol. 2, 558b11-12, 『仏説阿羅漢具徳経』T no. 126, vol. 2, 831b19。 7) ただし、Alsdorf 1968: 301では、*āsiviso, so tā mā viheṭhesi* となっている。 8) Mp I.325-326では、事前の警告がなく、竜の形容(*caṇḍo kir' ettha nāgarājā*)、入室と結跏趺坐の描写(*nāgarājassa vasanaṭṭhānaṃ pavisitvā pallaṅkaṃ ābhujitvā nisīdi*)も独自である。 9) ちなみに、畜生である竜が出家できないことについては、Vin I.87-88参照。 10) *nāgo kujjhivā "konāmāyaṃ muṇḍako mayhaṃ vasanaṭṭhānaṃ pavisitvā nisinna" ti dhūpāyi. therō uttaritaraṃ dhūpāyi. nāgo pajjali. therō uttaritaraṃ pajjalitvā tassa tejaṃ pariyādiyi.* 11) *so "mahanto vatāyaṃ bhikkhū" ti therassa pādāmūle nipajjitvā "bhante tumhākaṃ saraṇaṃ gacchāmi" ti āha. "mayhaṃ saraṇagamanakiccaṃ natthi, dasabalassa saraṇaṃ gacchā" ti. so "sādhū" ti tisa- raṇagato hutvā tato paṭṭhāya na kañci viheṭheti, devaṃ pi sammā vassāpeti, sassāni sammā*

(204)

ナーガ調伏のモチーフ (林)

sampajjanti. 12) この語は、写本や刊本によって padhūpāyi, padhūmāyi, padūpāsi, dhūmāyi と異なるため、この差異を比較検討や判断の根拠にすることはできない。

13) 確かに竜王調伏の場面で使用されているのはここだけだが、この表現自体は他のパーリ註釈文献にも数例見られる。林 2014a: 54 および 62, n. 18 参照。 14) 蔵訳『根本有部律』(漢訳は異なる)の飲酒戒因縁譚と Divy でも善来が竜を連れて釈尊の許での三帰依・五戒という筋。平岡 2007: 345, n. 204 参照。拙稿(林 2014b: 348)では、北伝のナンダウパナンダ竜王調伏説話において同様の展開は『増一阿含』のみと指摘したが、蔵訳『根本有部律』の入王宮門戒因縁譚(P no. 1032: Te 71a7; D no. 3: Ña 78a3-4)にも見られることを改めて訂正しておきたい。

15) 描かれる戦闘内容は大きく異なるが、現存漢訳『仏説沙曷比丘功德経』T no. 501, vol. 12, 770a23-c28 (cf. 『経律異相』T no. 2121, vol. 53, 87a26-b27)に類する経と思われる。菅原 2000: 73-74 参照。 16) 蔵訳『根本有部律』(P no. 1032: Te 28a2; D no. 3: Ña 30a7)は Divy と同じ。ただし、漢訳(859a1)では「降伏毒竜善来第一」と言う。

〈使用テキストと略号〉

Divy *The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends*. Ed. Edward B. Cowell and Robert A. Neil. Amsterdam: Oriental Press NV / Philo Press, 1970.

パーリ文献は PTS 版を使用し、略号は *A Critical Pāli Dictionary* に従う。

〈参考文献〉

Allon, Mark. 1997. *Style and Function: A Study of the Dominant Stylistic Features of the Prose Portions of Pāli Canonical Sutta Texts and Their Mnemonic Function*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

Alsdorf, Ludwig. 1968. *Die Āryā-Strophen des Pali-Kanons: Metrisch Hergestellt und Textgeschichtlich Untersucht*. Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur.

岩井昌悟 2006 「阿難以前の侍者伝承と雨安居伝承」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究【11】個別研究篇Ⅲ』中央学術研究所, 115-150.

菅原泰典 2000 『経集部小経解題』(仙台).

林隆嗣 2014a 「仏典結集で収載されなかった *Nandopananda* [-*nāgarājadamana*] と北伝資料について」『印度学仏教学研究』63 (1): 350-343.

林隆嗣 2014b 「仏典結集で収載されなかった *Nandopananda* [-*nāgarājadamana*] ——上座部における外典文書の形成と展開——」『パーリ学仏教文化学』28: 47-68.

平岡聡 2007 『ブッダが謎解く三世の物語——『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳——』上, 大蔵出版.

森章司・本澤綱夫 2009 「コーサンビーの仏教」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究【14】基礎研究篇Ⅴ』中央学術研究所, 147-258.

〈キーワード〉 パーリ註釈文献, ナンドーパナンダ, サーガタ, 飲酒戒, 『根本説一切有部律』

(こども教育宝仙大学教授, PhD)